上佐鳥中原前遺跡

特別養護老人ホーム「春日の里」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

粕川村出土文化財管理センター
11.2.15
第 1731 号
収受

粕川村出土文化財管理センター

序

南に向かってどこまでも伸びる広い前橋台地。その中に水田が広がり、集落が点在しています。秋には黄金色の稲穂の波がうねり、春には小麦、大麦の麦穂が波打つ前橋の穀倉地帯の中に上佐鳥中原前遺跡があります。

当地は古くからの農村地域であり、水田地帯のため、あまり遺跡地とは認められない場所でした。

近年の発掘調査の進歩の結果、水田跡にも目が向けられ、小さくは水田自体の様子、大きくは条里制水田のあり方を通しての当時の支配状況の解明に取り組んでいるようです。

上佐鳥中原前遺跡の周辺にも多くの水田跡が発掘されており、水田に関する資料もだいぶ蓄積されてきております。

今回の発掘調査は特別老人ホーム建設に先立ち行われました。面積も狭く、建物の予定の部分のみの調査であるため、発掘調査が虫食い状を呈し、今一つ痒い所に手が届かない面もありましたが、平安時代末期の水田跡を調査することができました。

近くの高校からも教科の学習の一環として見学に来て、火山灰に埋もれた水田の様子、水口や畦畔に驚嘆の声をあげていたことが印象的です。

水田址は長方形で19区画発見されました。大畦畔等の条里制の存在を直接に証明できるものの発見はありませんが、長方形の地割りは何らかの区割りが行われていたことを示すものであります。畦畔の方向は前橋台地のほかの遺跡の同時期の水田跡と比較することで、広くとらえられると考えられます。水田跡の資料を地図に落としていく事などを通して、新たな発見の１ページと成りえると考えています。

ご一読いただきまして、水田の資料に加えるとともに、ご指導、ご助言いただければ大変ありがたいと思います。

平成10年３月27日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団
団　長　中　西　誠　一

目　　次

序
例　言
本　文
Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1
Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 1
Ⅲ　発掘調査の方法と経過 …… 3
Ⅳ　基本層序 …… 4
Ⅴ　遺跡の概要 …… 5
Ⅵ　まとめ …… 9

挿　図
Fig. 1　上佐鳥中原前遺跡周辺遺跡図 …… 2
Fig. 2　基本土層図 …… 4
Fig. 3　古墳時代全体図 …… 5
Fig. 4　平安時代水田址全体図 …… 7

写　真
PL. 1　調査区全景 …… 1　　PL. 2　土層断面 …… 4
PL. 3　水路状遺構 …… 7

表
Tab. 1　水田址計測表 …… 6

抄　録

例　　言

1．本報告書は、特別養護老人ホーム「春日の里」建設に係る上佐鳥中原前遺跡発掘調査報告書である。
2．本遺跡の遺跡コードは9G17である。
3．調査主体は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団である。
4．発掘調査の要項は次のとおりである。

調査場所	群馬県前橋市上佐鳥町773－1番地他2筆
発掘調査期間	平成9年4月23日～平成9年5月23日
整理・報告書作成期間	平成9年5日26日～平成10年3月27日
発掘・整理担当者	飯田祐二・佐藤則和（前橋市埋蔵文化財発掘調査団調査係）

4．本書の原稿執筆・編集は飯田・佐藤が行った。
5．発掘調査・整理作業にかかわった方々は次のとおりである。（順不同）
阿部シゲ子　石川　弘　落合忠雄　神澤とし江　桐谷秀子　桜井　弘　高橋　孜
中村新太郎　奈良岩雄　矢島アイ子　柳井晶子

Ⅰ　調査に至る経緯

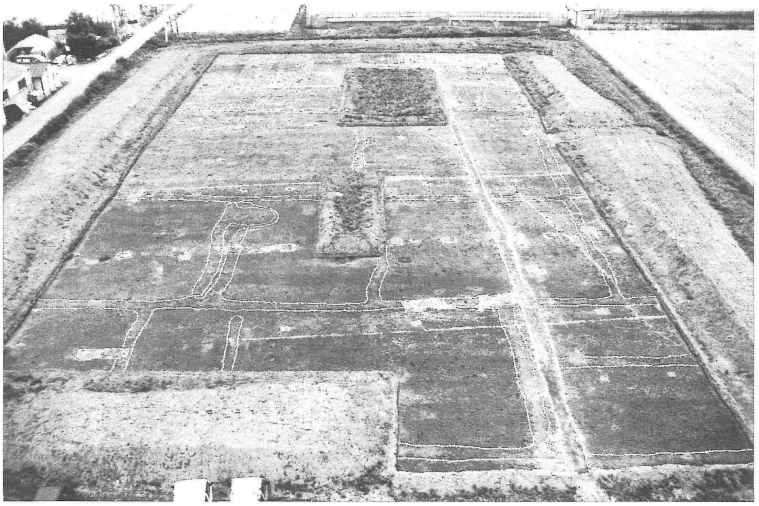
本遺跡の発掘調査に関して、平成８年９月５日付で社会福祉法人上川会より上佐鳥地内の特別養護老人ホーム建設工事に伴う埋蔵文化財試掘調査依頼が前橋市教育委員会に提出された。これを受け、同年９月13日教育委員会文化財保護課で試掘調査を実施したところ、本調査地は遺跡地であることが判明した。そこで、社会福祉法人上川会と協議・調整を行い、９年２月17日、社会福祉法人上川会より前橋市教育委員会あてに本発掘調査の依頼がなされた。前橋市教育委員会が組織する前橋市埋蔵文化財発掘調査団はこれを受諾し、４月17日両者の間で本発掘調査の委託契約を締結、４月23日、現地での発掘調査を開始するに至った。なお、遺跡名称『上佐鳥中原前遺跡』の『中原前』は旧地籍の小字名を採用した。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

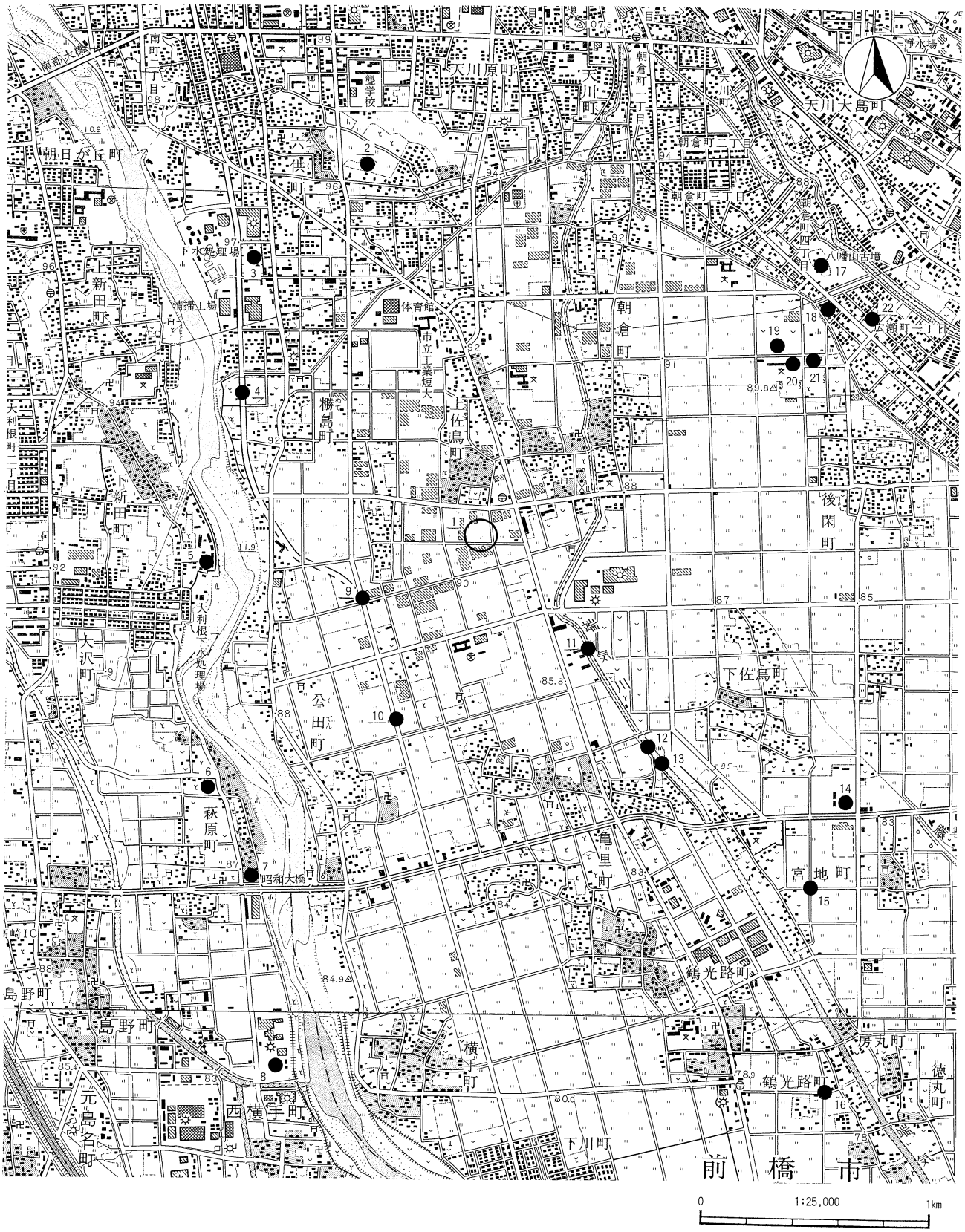
上佐鳥中原前遺跡は、前橋市街地の南方にあり、ＪＲ前橋駅から南へ約３㎞に位置する。この町の周りの利根川左岸には、櫛島町・六供町・朝倉町・下佐鳥町・亀里町・公田町等の町々が点在している。遺跡地の地番は、前橋市上佐鳥町773-1番地外２筆である。

本遺跡は、標高88ｍ前後の前橋台地東端の平坦地に立地している。遺跡の西方１㎞には利根川が南流し、東側約150ｍには前橋・玉村線が南北に走り、その東約300ｍには前橋台地の潅漑用水になっている端気川が南流している。土地利用としては、北側と西側に住宅が点在し、南側は水田が広がり一部はビニールハウスでの野菜の栽培が行われている。また、500ｍ南には県立前橋南高校がある。

本遺跡付近には六供下堂木Ⅱ遺跡・中大門遺跡・櫛島川端遺跡・公田池尻遺跡・公田東遺跡・宮地中田遺跡などの水田址遺跡が存在し、北東約1.8㎞には天神山・八幡山などの朝倉・広瀬の古墳群がある。(Fig. １)



ＰＬ．１
調査区全景（東より）



1 上佐鳥中原前遺跡　2 六供下堂木Ⅱ遺跡　3 中大門遺跡　4 勝島川端遺跡　5 下新田遺跡　6 萩原団地遺跡
7 浅間神社古墳　8 西横手遺跡　9 公田池尻遺跡　10 公田東遺跡　11 下佐鳥遺跡　12 宿阿内城内遺跡
13 川曲遺跡　14 東田遺跡　15 宮地中田遺跡　16 西田遺跡　17 八幡山古墳　18 坊山遺跡
19 後閑団地遺跡　20 後閑遺跡　21 後閑Ⅱ遺跡　22 天神山古墳

Fig. 1　上佐鳥中原前遺跡周辺遺跡図

Ⅲ　発掘調査の方法と経過

1　方　　法

委託された調査箇所は、東西約約76ｍ、南北約37ｍの長方形の建物部分で、総面積は、二か所の中庭部分を除いた2,661㎡である。グリッドについては、４ｍピッチで西から東へＸ１、Ｘ２、Ｘ３……Ｘ21で表し、北から南へＹ１、Ｙ２、Ｙ３……Ｙ11、と付番し、グリッドの呼称は北西杭の名称を使用した。なお、Ｘ10・Ｙ７の国家座標は、第Ⅸ系のＹ＝－66,960ｍ、Ｘ＝＋39,372ｍである。また調査は東側から表土掘削・遺構確認・杭打ち・遺構掘り下げ・遺構精査・全景写真・遺跡全体測量の順に行った。図面作成は平板・簡易遣り方測量で行い、主要な畦畔の断面等はスケール1／20で、遺構全体図はスケール1／40で作成した。

2　経　　過

平成９年４月23日、調査区東側から重機（バックフォー0.7㎥）による表土掘削を開始。現耕作土を40～50㎝掘り下げたところで、層厚平均５㎝の浅間Ｂ軽石層（Ａｓ－Ｂ：1108年降下）、その下に平安時代の水田耕作遺構面が現れた。その後、鋤簾かき・移植ごてによる遺構精査を順調に進めた。南北方向に昭和48年頃に建てられたビニールハウスの基礎のカクランが入っており、表面の耕作土が薄い西側には、昭和45年頃の土地改良の天地返しの機械による筋状のカクランが規則的に入り、遺構の残存状況は悪かった。

５月中旬には、南北東西畦畔とそれらの畦畔から構成される19枚の水田と南東部に水路を一本確認することができた。そして、５月19日にハイライダーによる全体写真撮影を行った。

調査区南東部の深堀の土層から、浅間Ｂ軽石層下約12㎝に遺構面と思われる粘性の強い黒色土が確認できたために、写真撮影日から二面目の掘削を開始した。浅間Ｂ軽石下の遺構面から約10～15㎝下に榛名二ツ岳第一軽石流（Ｈｒ－ＦＰＦ－１：６世紀前葉降下）が約４㎝の厚さで堆積していた。その下からは、浅間Ｃ軽石（Ａｓ－Ｃ：４世紀前葉降下）混じりの遺構面と思われる黒土が確認された。しかし、遺構面と思われる黒土は、南東部の一部のみで調査区全体には確認できなかった。さらに３㎝下に浅間Ｃ軽石が堆積していた。調査区北東部の微高地では、動物の足跡に 榛名二ツ岳降下火山灰（Ｈｒ－ＦＡ：６世紀前葉降下）が堆積していたり、北西部では浅間Ｃ軽石とその下との間に植物が倒れた跡と思われるものを検出したりした。

二面目は、遺構の確認をしながら鋤簾かきをおこなった。しかし、榛名二ツ岳第一軽石流の残りが一部だけであり、三面目は浅間Ｃ軽石層下の遺構の確認はできずに５月23日に全調査を終了した。雨による冠水により延びたが６月２・３日と埋め戻し作業を行い現地における発掘調査を完了した。その後、平成10年１月５日から城南収蔵庫で報告書作成に向けて整理作業を行い、３月27日すべての作業を終了することとなった。

Ⅳ 基 本 層 序

本遺跡は、前橋台地の東端に位置している。この前橋台地は、約２～2.5万年前の浅間山の火山活動によってつくられた岩屑や泥流物で形成されている。その後、榛名山や浅間山の噴火による軽石、火山灰が堆積し、現在に至っている。本遺跡の層序は、場所によりその堆積状況に違いはあるものの、 基本的にＦig. ２に示した通りである。

Ⅰ層　暗褐色粗砂層。現耕作土。

Ⅱ層　にぶい褐色細砂層。白色軽石2～3㎜を30％含む。
明褐色の筋あり。

Ⅲ層　褐灰色粗砂層。
Ａｓ－Ｂ(浅間Ｂテフラ：1108年)軽石純層。
下部は褐色。

Ⅳ層　黒褐色微砂層。平安時代の水田耕作土層。

Ⅴ層　褐灰色微砂層。

Ⅵ層　灰褐色細砂層。
Ｈｒ－ＦＰＦ－１（榛名二ツ岳第一軽石流：６世紀前葉）層。褐色の鉄分凝結あり。

Ⅶ層　黒褐色微砂層。古墳時代の遺構面。
Ⅷ層のＡｓ－Ｃ（浅間Ｃ軽石：４世紀前葉）を20％含む。(調査区南東部の一部のみ)

Ⅷ層　褐灰色微砂層。Ａｓ－Ｃを50％含む。

Ⅸ層　褐灰色微砂層。

Ⅹ層　褐灰色微砂層。オレンジの鉄分凝結あり。

Ⅺ層　灰褐色微砂層。白色のシルトブロックを20％含む。

Ⅻ層　灰白色微砂層。シルト層。Ⅺ層が上部にあり。

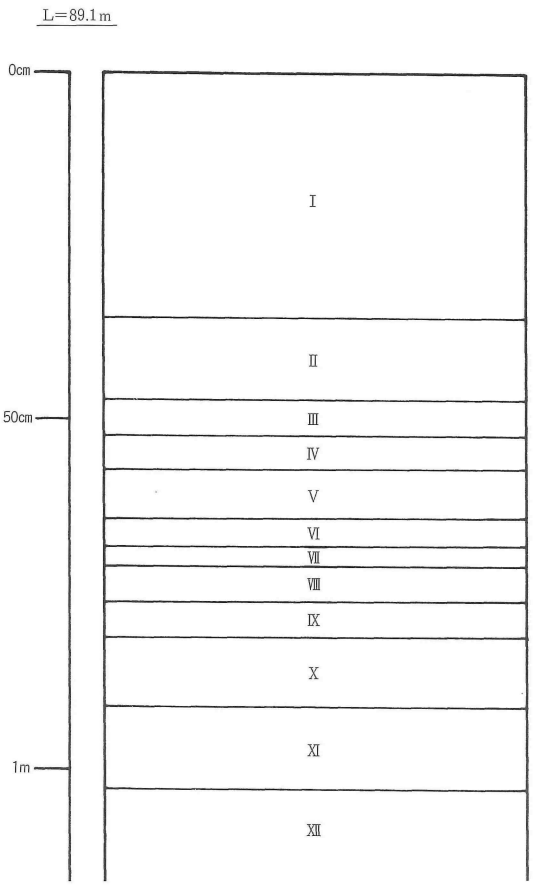
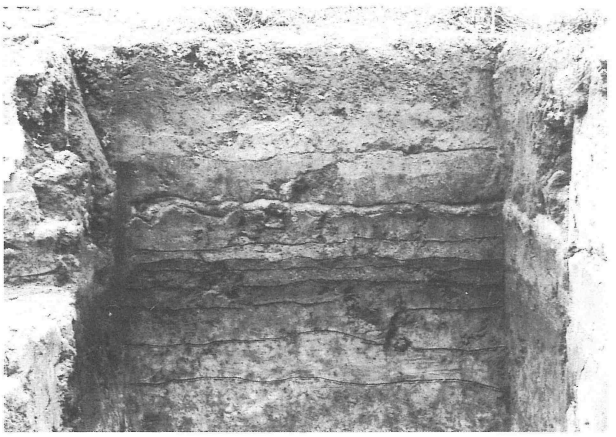


Fig. ２　基本層序（調査区南東）



ＰＬ．２　土層断面（調査区南東）

V　遺跡の概要

上佐鳥中原前遺跡では３面の発掘調査を行い、１面目からは平安時代末期（天仁元年・1108年）の浅間山噴火に伴う軽石（Ａｓ－Ｂ軽石）で埋没した水田址が、２面目から６世紀初頭（古墳時代）の榛名山噴火に伴う火山灰・軽石流（榛名二ッ岳渋川テフラ）に覆われた黒色土層が、３面目からは４世紀前葉（古墳時代初頭）の浅間山噴火に伴う軽石（Ａｓ－Ｃ軽石）に覆われた粘性の強い褐灰土層が確認された。それぞれの時代に分けて概要を以下に述べてみたい。

１　古墳時代

現耕作土から約60㎝下に６世紀初頭（古墳時代）の榛名山噴火に伴う火山灰・軽石流（榛名二ッ岳渋川テフラ）が堆積していた。軽石流（二ッ岳第一軽石流：Ｈｒ－ＦＰＦ－１）は調査区全体に広がっていたが、火山灰（二ッ岳火山灰：ＦＡ）は調査区北部を中心に、遺構面の凹部だけに埋まっているという堆積状況だった。そして、その直下から粘性のある黒色土層が確認された。この黒色土層は調査区南東部で確認されたが、北、西方向へいくにつれて、ＦＡ下のＡｓ－Ｃ（浅間Ｃ軽石：４世紀前葉。古墳時代初頭）が混入する割合が多くなっていった。結局、この黒色土が層として存在していたのは調査区南東部だけであった。北部のＦＡの堆積していた凹部は動物の足跡、植物の株跡と思われるが断定には弱いものであった。

榛名二ッ岳渋川テフラの約５㎝下に４世紀前葉（古墳時代初頭）の浅間山噴火に伴う軽石（Ａｓ－Ｃ軽石）が堆積していた。この軽石層は調査区全体で確認され、直下には粘性の強い褐灰土層が確認されたが遺構は確認されなかった。

この二面については遺構が存在したと思われる粘質の層は確認できたが、どのようなものがあったかということについての判断はできないという結論に至った。

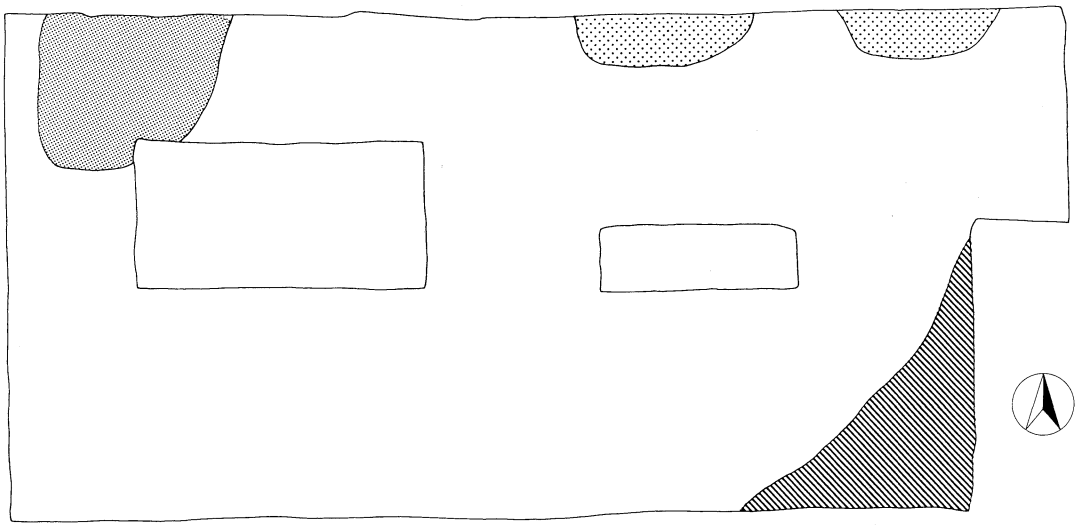


Fig.　3　古墳時代全体図

2　平安時代

平安時代の遺構は平安時代末期（天仁元年・1108年）の浅間山噴火に伴う軽石（Ａｓ－Ｂ軽石）で埋没した水田址である。水田遺構面は現耕作土下約40～50cmにあり、それを層厚３～５cmのＡｓ－Ｂ軽石純層が覆っていた。調査区西部は現耕作土層が薄かったため、土地改良工事で使用された重機の掘削により平行な筋状の刻みが多数見られ、畦畔の検出は困難であった。

19枚の水田区画が検出された。調査区の関係から四方を畦畔に囲まれた完全な形のものはなかったが、畦畔の走向からほとんどの区画が長方形と推測できる。水田面は凹凸が少なく、足跡等のくぼみは見られず平たんであった。北西の角の標高87.81ｍを最高点として南東の角の標高87.57ｍを最低点とする24cmの比高差を測ることができ、北西から南東にかけて約3.06／1000の勾配がある。

検出された畦畔は東西方向の畦畔が11本、南北方向の畦畔が９本の合計20本であった。各畦畔の走行する方向は各正方位に対して０～７°とほぼ東西・南北の正方位に合致している。畦畔の構造は下幅63～100cm、上幅28cm～62cm、水田面からの高さ２～４cm、断面形は、後世の圧縮により偏平な台形状に変形している。水口については、３箇所検出された。また、調査区南東部の区画№9と№10の間には水路と思われる遺構が検出された。

Tab. 1　　水田址集計表

番号	面　積	東　畦	西　畦	南　畦	北　畦	形　状	水　口	備　　考
1	(6.15)	－	(5.97)	－	(0.8)			
2	(56.70)	(8.92)	(8.64)	6.30	－	方　形		
3	(45.12)	(8.40)	(8.37)	5.78	－	方　形		
4	(123.32)	(6.23)	14.40	(6.53)	11.62	方　形	S＝1	推定面積　166.50
5	(31.04)	－	4.73	(6.44)	(6.31)	方　形	N＝1	
6	(42.13)	－	(6.51)	－	(6.06)			
7	(23.98)	(1.95)	(1.54)	14.94	－	方　形		
8	(194.92)	13.76	(13.59)	(7.42)	14.45	方　形		推定面積　195.10
9	(87.28)	8.97	(5.97)	14.30	(5.67)	方　形	S＝1	推定面積 124.79　南畦畔に水路状の遺構
10	(47.69)	(9.21)	(9.32)	－	14.03	方　形	N＝2	北畦畔に水路状の遺構
11	(11.34)	(1.38)	(0.40)	13.65	－			
12	(297.33)	(13.67)	(8.01)	(12.70)	21.70	方　形		推定面積342.07
13	(384.24)	(16.24)	(17.03)	－	(12.74)	方　形		
14	(3.18)	(0.32)	(0.47)	6.83	－			
15	(66.48)	(4.66)	(2.83)	17.89	－	方　形		
16	(88.65)	(3.64)	7.64	(2.96)	17.43	方　形		推定面積　121.17
17	(68.02)	(8.06)	(9.05)	(15.10)	(2.92)	方　形		推定面積　280.70
18	－	(7.81)	－	－	(14.94)			
19	－	(21.64)	－	－	－			

註）表の記載は以下の基準で行った。

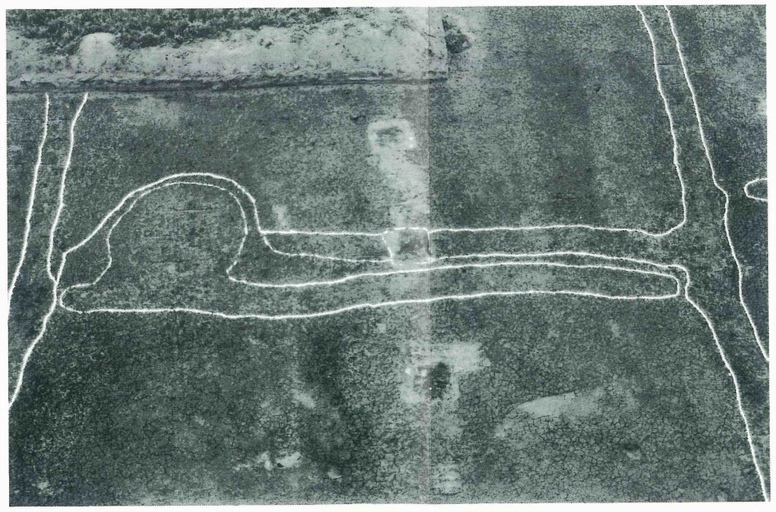
①水田面積の算出については1／160の縮尺でプラニメーター（ローラー極式・レンズ式）による３回計測平均値を使用した。なお、小数点以下３桁は四捨五入した。

②水田の面積の単位は㎡、各畦畔の長さはｍ、確認値は（ ）で示した。

③№18，19は畦畔が不明なため、範囲確認できず、面積計測できなかった。

④№４，８，９，12，16，17の推定面積は方形と想定して計測した。

Fig. 4　平安時代水田址全体図



ＰＬ．３　水路状遺構（南より）

Ⅵ　ま　と　め

今回の発掘調査の結果、上佐鳥中原前遺跡からは、古墳時代、平安時代の遺構面が確認できたが、ここでは本遺跡の中心となる平安時代末のＡｓ－Ｂ下水田址について述べてみたい。

1108年（天仁元年）の浅間山噴火に伴う浅間Ａｓ－Ｂ軽石に埋没した平安時代末期の水田址19枚を検出することができた。この時期の水田址の調査研究ではまず、「条里制」という観点から考察する必要があろう。

条里的地割の存在の有無は坪境畦畔によって１町（約109ｍ）方格の区画を形成していること、１町方格内部の地割が半折型または長地型になっていることが基準と考えられる。しかし、本遺跡から坪境畦畔と思われる畦畔は検出されず、坪境畦畔から条里的地割の存在を確認することはできなかった。しかし、調査範囲が東西約80ｍ、南北約35ｍと１町方格内に入ってしまうので、本遺跡の区画を１町方格内部の地割と比較して検証してみる。検出された20本の畦畔のうち、９本の南北畦畔は北の正方位に対して０～５°の誤差で、11本の東西畦畔は東の正方位に対して０～７°の誤差で直線的に走行している。そして、ほぼ平行に走る５本の南北畦畔に東西畦畔が直交、あるいはＴ字型に交わり、長方形の区画を形成している。このことから本遺跡の区画は南北畦畔を基準に長方形の区画が南北方向に並んでいることが考えられる。基準と考えられるこの５本の南北畦畔の間隔は、№１～２間が12.5ｍ、№２～３間が15.6ｍ、№３～４間が22.8ｍ、№４～５間が19ｍとなっている。この間隔はどの南北畦畔を基準にしても長地型（約10.8ｍ：６間）、半折型（約21.6ｍ：12間）の間隔に相当しない。以上のように、遺構からでは条里的地割が存在していたことを断定はできない。しかし、各畦畔の走向が正方位に近く、長方形の区画が南北方向に形成されていることは明らかに人為的かつ計画的に作られたと考えられる。

次に本遺跡周辺の条里的地割の様子から本遺跡の条里的地割の存在について考えてみる。本遺跡付近の条里的地割は利根川西岸の高崎市日高から矢中にかけての高崎東部地区を中心に確認されている。そして、本遺跡の南東に位置している西田遺跡、宮地中田遺跡の前橋南部にも条里的地割が広がっていることが確認された。そのため、本遺跡においても条里的地割が存在しても不思議ではない。また、坪境畦畔は区画上重要なものなので、水路や道路等に形を変えながらも受け継がれている場合がある。地籍図（明治６年）、迅速図（明治18年）、土地改良以前の現形図（昭和43年）を見ると本遺跡周辺では条里的地割を受け継いでいると思われる水路、道路で区画された方格地割が多く見られる。また、北へ約２㎞の字「市ノ坪」や南の「亀里」町など条里に関係すると思われる地名が残っている。これらのことから本遺跡地の水田址も条里的地割の影響を受けている区画であると推測できる。

最後に水田への配水機能について考えてみる。水田址遺構面は北西の標高87.81ｍを最高点とし

て南東の標高87.57ｍを最低点とする24cmの比高差を測ることができ、北西から南東へ約3.06／1000の勾配がある。東西畦畔を境とする東・西側の区画、南北畦畔を境とする北・南側の区画では１～４cmの比高差があり、東側の区画、南側の区画が低くなっている。水口は３箇所検出されたが、本遺跡の水田への給水方法はこの高低差を利用し、標高の高い水田が満水になった後、畦畔をオーバーフローして、順次南の方向へ流れ込む、「かけ流し」の方法をとっていた可能性が考えられる。また、南東部の№９・10区画間に水路が検出された。この水路は東西畦畔に沿って走向しており、幅120～130cm、深さ５～８cmである。この水路は№10区画へ２カ所の水口が検出された。この水口は２カ所とも下流の水田に接しており、給水口と思われる水口ではなかった。しかし、西側の水口が水田面から４cm、東側の水口が水田面から１cmとなっているので、西側水口から給水し、東側水口から配水すると考えられる。以上のことから、この水路は、水温調節などのために水を循環させる役割をもっていた可能性が考えられる。

今回の発掘調査は調査範囲が限られていたため、局部的な資料からの判断に過ぎない。本遺跡周辺地域は現地表での条里的地割が残っているので、条里制水田址が広範囲に及んでいる可能性は高いと思われる。今後の周辺地域からの坪境畦畔、条里的地割の検出により、前橋南部の条里的地割の全体像が見えてくることに期待し、今後の課題としたい。

参考文献

弥永貞三ほか　1967『歴史時代（下）』「条里制の諸問題」
落合重信　日本歴史叢書　『条里制』
『群馬県史』通史編　2
前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1995　『中原遺跡群Ⅳ』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1996　『西田遺跡』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1997　『宮地中田遺跡』

抄　　録

フリガナ	カミサトリナカハラマエイセキ
書名	上佐鳥中原前遺跡
副書名	特別養護老人ホーム「春日の里」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	飯田祐二　佐藤則和
編集機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	〒371　群馬県前橋市上泉町664－4
発行年月日	西暦1998年3月27日

フリガナ 所収遺物名	フリガナ 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
カミサトリナカハラマエ 上佐鳥中原前	マエバシシカミサトリマチ 前橋市上佐鳥町	10201	9G17	36°21′09″	139°05′13″	19970423 19970523	2,661㎡	特別養護老人ホーム「春日の里」建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上佐鳥中原前	水田址	平安時代	水田址　19枚	なし	

上佐鳥中原前遺跡

1998年3月20日　印刷
1998年3月27日　発行
編集・発行　前橋埋蔵文化財発掘調査団
前橋市上泉町664－4
TEL　027－231－9531
印　　刷　松本印刷工業株式会社
前橋市紅雲町一丁目12－3